

齊藤日出治『グローバル化を超える市民社会——社会的個人とヘゲモニー』新泉社、2010
『大阪産業大学経済論集』第12巻 第2号、2011

1 本書の特徴と課題

著者は、市民社会を方法的概念としてグローバル化を批判的に解説し、新自由主義に対する思想的、理論的対抗軸を追求してきたグローバル化研究の第一人者である。本書は、著者が次々に斬新な問題提起と議論を展開してきた一連の著作、『国家を超える市民社会——動員の時代からノマドの時代へ』（現代企画室、1998）、『空間批判と対抗社会——グローバル時代の歴史認識』（現代企画室、2003）、『帝国を超えて——グローバル市民社会序説』（大村書店、2005）に次ぐ著作であり、氏のグローバル化研究の到達点と今後の展望を示す作品である。本書の全体的な特徴として、著者が以前には批判的であったネグリ、ハートの『帝国』『マルチチュード』の議論を積極的に吸収した展開を試みていること（本書188ページ）、グローバル化時代におけるマルクスの再発見、とくに社会的個人の概念の現代的意義を強調していること、著者の師であった平田清明の市民社会研究、とくに「市民社会とは、言葉を介して異質な諸個人が協同の関係を築き上げていく過程である」（本書244ページ）という市民社会論の意識的継承と展開を図っていること、の三点を指摘することができる。

著者によれば、本書の課題は「今日の新自由主義的なグローバリゼーションをその発生の源泉である市民社会に立ちかえることによって考察し、同時にこのグローバリゼーションへの対抗的ヘゲモニーの可能性を市民社会のうちに探り当てようとすることである」（本書14ページ）。ここで市民社会とは、「新自由主義のグローバリゼーションを生み出す源泉であると同時に、このグローバリゼーションを超えていく課題を不断に醸成する歴史のかまど」として、より具体的には、「国家の政策や資本蓄積を方向づける社会諸集団の合意形成が築かれるすぐれて政治的な領域」（本書15ページ）として定義されている。著者が本書を通して提起するのは、マルクス(1818-1883)、グラムシ(1891-1937)、ルフェーヴル(1901-1991)の古典でグローバル化を読み解くことから獲得される「対抗的ヘゲモニーとしての市民社会」の概念である。

2 本書の構成と内容

本書第I部「グローバル化時代の歴史認識」は、第1章「グローバル化時代の日常生活批判——神秘化意識の自己認識」、第2章「グローバル化時代の地方文化論——地方文化をめぐるヘゲモニー闘争」、第3章「グローバル化時代のメディア文化論——歴史認識をめぐるヘゲモニー闘争」から構成されている。第1章では、日常生活を疎外の源泉として把握するルフェーヴル『日常生活批判』に基づいて、レジャー、家庭生活、スポーツ、文化の諸領域といった日常生活が、共同性を奪われた私的意識を脱却し、共同意識をどのように獲得するかというヘゲモニー闘争の主戦場として分析され、対抗的ヘゲモニーが「社会的欲

求の組織化としての社会主義」として提起される。第 2 章では、ルフェーヴルのピレネー文化論（原著 1965 年、邦訳名『太陽と十字架』）に依拠して、地方文化の商品化と地方文化再生との抗争が、第 3 章では、消費のヘゲモニーとメディア・テクノロジー（映像メディア）と対抗的メディア（トランスナショナルな歴史認識）とのヘゲモニー闘争が地域と文化の具体的な文脈で描写される。

第 II 部「グローバル化時代における社会的個人の生成」は第 4 章「資本の生産諸力と社会的個人」、第 5 章「社会的個人と集合的身体」、第 6 章「社会的個人とグローバル社会主義の生成」から構成されている。第 4 章では、平田清明とネグリによる『経済学批判要綱』の解説、とくに、普遍的、協同的労働の担い手としての「社会的個人」の出現の意義が検討され、人びとの協働的相互作用が労働過程の支配的要素になった今日の資本蓄積過程にとって、「生政治的生产」が決定的な意味をもつようになったことが指摘される（本書 106 ページ以下）。すなわち、労働における労働者のコミュニケーションを制御したり、彼らの感情を組織したりする活動は、生政治的生产として、すなわち膨大な非労働時間の増大を剰余価値生産として組織する権力装置として作用しているが明らかにされる。第 5 章では、ヴィルノ『ポスト・フォードイズム』を使いながら、身体をめぐる生政治的管理——身体を広告、デザイン、医療の言説によって構成し、商品のコードへと誘導する生政治的管理——とそれに対抗する身体技法（対抗ヘゲモニー）が分析される。第 6 章では、グローバル化時代の資本蓄積がグローバル・コモンとして、人びとの協働的社会的な関係を発展させていること、ポスト・フォードイズムにおける労働の支配的形態は非物質的生产活動——非物質的生产物（知識、情報、サービス、コミュニケーション、文化的生産物など）に変化していること、グローバル化が新しい多様なコミュニティを再創造していることを前提として、21 世紀の社会主義の理念が次のように提唱される。「博愛の理念が諸個人の普遍的なきずなとなり、この理念に立脚して国家と市場を制御する軌跡の上に、21 世紀の社会主義の理念があらためて浮上するであろう」（本書 163 ページ）。著者によれば、グローバル化時代の社会主義は、国家、政党、労組、労働者階級といった共通の基盤をもたない、友愛または博愛を共通のきずなとして作り出される無数の複合的なネットワークとしてイメージされるのである。以上のような第 6 章は本書のなかでもっとも重要な章のひとつである。第 7 章では、ポスト政治的状况における社会形成の根源的実践としての政治の復権を提起するムフ（Mouffe2005）のラディカル・デモクラシーに依拠して、まずベックの内省的近代化論とギデンズの第二の近代化論が政治から敵対性を排除した自由主義思想の典型例として性格規定され、彼らのグローバルな政治秩序とコスモポリタン民主政治の議論が紛争や敵対関係のない政治を想定していて、世界の現実である新しい敵対的な多元主義の爆発的な高揚を説明できない点が批判される。ついで著者は、社会形成の根源にある政治的なるものを強調し、社会諸関係の接合様式としての政治の復権を提唱するラディカル・デモクラシー（ムフ）とマルチチュードが「共」をわがものにする回路=方法としての絶対的民主主義（ネグリ、ハートの『帝国』の立場）とを統合する対場を提起する。

ムフは「均質空間の想定し社会闘争の複合的次元を看過している」としてネグリ、ハートの『帝国』を批判しているが、著者はネグリとハートの『帝国』を、ムフの言う「政治的なもの」のトランスナショナルな次元での出現を洞察し、グローバルな社会秩序の根底にある敵対関係を読み取っていると評価する。著者によれば、『帝国』はグローバルな秩序における、生政治的生産の組織化をめぐる生政治的権力（知識、コミュニケーション、情報、社会関係などの非物質的財の生産を組織する活動による、資本の剰余価値の源泉＝「共の収奪＝収用」と「共」の担い手としてのマルチチュード（産業労働者、家庭の女性、農民、移民労働者、失業者、貧民）とのヘゲモニー闘争に焦点を当てているのである。第8章では、グラムシのヘゲモニー概念、すなわち、同意形成のために支配階級が行使する知的・道徳的指導性に基づいて、ネオ・コーポラティズム（フォーディズム）からガヴァナンス（新自由主義革命）へと市民社会のヘゲモニー構造が転換したことが分析され、さらに今日の新自由主義の危機と対抗的ガヴァナンス（人権概念を軸とした多様な社会運動の統合）が展望される。第9章では、地球的な権力関係の再構築（ネオ・グラムシアン）、多元的ネットワーク・ガヴァナンス（EU）、経済学の制度主義的転回という視点から、社会闘争としてのグローバル・ガヴァナンスの諸相が分析される。第10章では、上村忠男氏のグラムシ研究に依拠して、「工場の外の生活も工場の生産装置を最大限効率化するように組織され、社会全体があたかも巨大な生産装置とみなされる」「全体国家」（総力戦体制）の出現に対するグラムシの分析が紹介されたうえで、「無秩序と排除と紛争が渦巻く現代のグローバル市民社会」においては、二〇世紀が夢見た「組織された生産者社会」（全体国家）は実現不可能であること、それを超える新しい課題が提起されることが展開される。著者が提唱する新しい課題とは、アンリ・ルフェーヴルが理論化したところの、「社会的欲求の組織化」としての社会主義である。著者によれば、ルフェーヴルが社会主義の課題を生産の合理的計画的組織化ではなく、新しい協同的關係を形成する場としての都市的なものを重視しながら、社会的欲求の組織化（都市への権利）として定式化したことが決定的に重要である。なぜなら、社会的欲求の組織化としての社会主義は新しい倫理的要素を含むからである。著者は本書の結語にあたる項目「グローバル・カタルシス（精神的浄化）に向かって」のなかで、人びとが構造の矛盾を都市的生活様式（日常意識）において意識し、構造の転換を希求するようになる、新しい倫理的政治的形式の出現を、貧困・格差・環境破壊の問題を国家の手ではなく市民社会のレベルで連帯と公正の理念に基づいて解決する方向をめざす、アジアに広がる連帯経済のうちに、意思決定の民主化と利潤よりもコミュニティへの貢献を重視する、欧州に広がる社会的経済のうちに、見出している。著者がポスト・グローバリゼーションの歴史的選択の方向性として提示するものは、生産の合理的組織化でも私的利益の最大化でもなく、倫理的要素をとまなう、生活様式の変革の問題としての、人びとの社会的欲求の自己組織化である。

3 論点と若干のコメント

本書を含む著者のグローバル化の批判的解説によって提起されたもっとも重要な論点は、グローバル化によって作り出された新しい社会的次元は、ネグリやハートによる「帝国」の概念によってではなく、「グローバル市民社会」の概念によって理解されるべきであるという主張である。評者はこの主張を肯定的に受け止め、今日のグローバル化を根底的に理解するためのカギだと考えている。この著者の主張をより具体的に理解し発展させるためには、読者は自分の頭で、「生政治的生産」はグローバルな資本蓄積にとってなぜ重要なのか、ポスト・フォーディズムにおける労働をどうみるか、新自由主義のヘゲモニーはいかに生まれたのか、対抗的ガヴァナンスとしての、人権概念を軸とした多様な社会運動の統合の可能性、といった論点を最把握する作業が必要であろう。そのうえで、評者は本書に対する若干のコメントと感想を述べることにする。

第一に、市場原理主義の対抗軸として、社会主義理念をいかに再構築するかという論点を提起していることが本書をおもしろく、動的なものにしている。著者は本書ではじめて、倫理的要素（友愛、連帯、公正）を重視しながら、新自由主義の言説に対抗して社会的欲求の組織化としての社会主義の理念を提起した。この点に注目すれば評者には、本書を倫理的次元（友愛）——>政治的次元（敵対関係の次元、新自由主義のヘゲモニー 対 根源的民主主義・ラディカル・デモクラシー）——>経済的次元（社会的欲求の自己組織化としての、新しい協同的關係）——>倫理的次元という循環的論理によって立体的に理解することができるように思われる。例えば、今日のグローバル化の対抗軸を社会的欲求の組織化という倫理的要求と新自由主義のヘゲモニーとの対抗として、あるいは、新自由主義のヘゲモニーのもとでの倫理・政治・経済の連関に対抗する、社会主義への倫理的要求がラディカル・デモクラシーを介して経済的次元における社会的欲求の自己組織化につながられるオルタナティブな社会形成の可能性として、理解することができるように思われる。

第二に、著者はグローバル市民社会を主として敵対的關係としての政治的次元で理解し、民主主義を「経済、政治、文化、社会の諸領域を接合する媒介概念」として規定しているが、経済的次元の分析がやや希薄であるように思われる。この点は、著者と同じように、今日のグローバル化のもとで「国境をこえる市民社会」の形成を確認する八木紀一郎(2005)が経済的次元を重視するのは対照的である。本書でグローバル市民社会の倫理的次元に注目した著者が今後、経済的次元にどのように切り込むのか、大いに注目されるころである。

第三に、本書が敵対的關係としての政治の復権を主張するラディカル・デモクラシーを重視していることの反面であるが、著者は本書では従来好意的に論じてきたポストモダンの立場に対して意識的に距離を取っている。本書には、著者のこれまでの著作の魅力の要素でもあった、「今日の歴史状況は、社会が客観的基盤を有するという信念をつき崩し、あらゆる社会秩序が暫定的な性格をもつことを暴き出した」「社会は規則的で安定したものとして前提されているのではなく、政治的实践によって構成される結果として存在する」(『帝

国を超えて』) といったポストモダンの社会理解がまったく見られない。評者には、著者が本書の執筆を通して、グローバル化と市民社会についての理論的・思想的認識において新しい重要な課題に遭遇しているように思われる。

本書は以上のように、グローバル化とは何か、グローバル市民社会とは何か、そもそも市民社会とは何か、といった問題について根底的に考察した知的刺激に富む研究である。グローバル化と現代市民社会について斬新な問題を提起し、新しい理念と思想を切り拓こうとする本書の公刊を機に、一段落したかに見えるグローバル化についての議論が再び活発に展開されることが望まれる。

参考文献

- 植村邦彦(2010)『市民社会とは何か』平凡社
塩野谷祐一 (2009)『正・徳・善』ミネルヴァ書房
平田清明(1993)『市民社会とレギュレーション』岩波書店
見田宗介 (2006)『社会学入門』岩波新書
見田宗介・大沢真幸 (2009) 名づけられない革命をめぐる、『at プラス』02
八木紀一郎 (2005) 国境をこえる市民社会——グローバル化のもとでの世界市場と市民社会——、山口定他編『現代国家と市民社会』ミネルヴァ書房、2005年
Mouffe C. (2005)On the Political, Routledge. (篠原雅武訳『政治的なものについて』明石書店)